



2021 年度の東京蜘蛛談話会行事

全ての行事を中止いたします

保留としておりました冬の例会につきましても

中止いたします

多摩だより（4）小下沢のクミサラグモ

新海 明

高校時代に通り詰めた小下沢での調査は大学入学後も続いた。私は大学に入ると、すぐに千葉県房総半島南部にある清澄山に毎月通い始めた。しかし、房総半島は東京からは遠く毎週というわけにはいかない。最近のキンダイアやアクタなどの紙面を占拠している鈴木佑弥さんは毎晩のように筑波大学の学生寮の周囲の森で夜間調査をしているようだ（2021年4月からは拠点を沖縄に移したと聞いた）。この「環境」と「ヤル気」がなければ、このような目覚ましい研究の成果は出なかったに相違ない。

私もその当時、近場で通り詰める調査地を探していた。そこで思いついたのが小下沢だった。高校時代から何度も通って付近の事情が良くわかっていたことや、その時に調査対象としていたクミサラグモが、ここ小下沢には腐るほどいた・・・からだ。このクモの張るハンモック網にかかる餌の種類と量を調べたかった。そのころ1970年代では、クモはその網にかかる虫なら何でも食べると漠然と思われていた。少なくとも、私の印象はそうだった。そんなときに読んだエルトンの生態学に「クモの網に象はかからない」という、今なら当たり前の記述に驚愕したのだ。「新海さん、そんなことも知らなかった・・・とは」とバカにされそうだが、私はこの言葉に「その通り！」といたく感動してしまった。

そこでどんな調査をしたかと言えば、クミサラグモの網の前に陣取り、ただその網にかかる餌を日がな一日チェックし続けたのだ（暇だったんだなあ）。まず、房総の清澄山でクミのたくさんいる場所を探し出し、網のそばの枝や葉っぱに番号を付したシー

ルを張り付けた。そして、どの網に何がかったかを時刻と共に記録した。こんな作業は東京の高尾近傍の小下沢ではできなかった。ハイカーが多すぎるのだ。では、小下沢でどんなことを調べたのかというと、クスミの成長過程と網サイズの変化を記録した。翻って、こんな調査は逆に清澄山ではできなかった。成長を迫うために毎週通うには遠すぎたからだ。

小下沢の調査では、林道沿いのクスミの網に番号をつけ、毎週一度網の大きさを番号ごとにチェックし続けた。網なんかにはマークをすれば、番号を付けたテープがはがされたり、網が壊されたりしまいか・・・と心配したが、そのような被害は無かった。良い時代だったのだろう。さらについでにクスミの網にかかった餌を採取して持ち帰った。けれども大雑把な同定までしかできなかった。カゲロウやカワゲラそして双翅類ばかりだった。これは清澄山での餌調査の結果とも同じだった。

私の目論見は「クモの網の属性によって、そこにかかる餌の種類には傾向があるに違いない」というものだった。今では「そんなことは当たり前じゃあないか」と言われそうだが、当時としては、そのような見方は斬新だったようだ。クモ学会の大会の発表で吉田真さんに「東京にもこんな見方をするもんもおるんかあ」と言われた覚えがある。

クミスアラグモの調査結果はキンダイアやアチプスなどのクモ関係の雑誌に報告することなく、なんと「動物のくらし(評論社)」という単行本に書いてしまった。私は、それをいたく後悔した覚えがある。研究などの成果は単行本などに書くのではなく、まずはクモ関係の雑誌に報告した上でいろいろな意見を聞き一般書としてまとめるのが筋ではないかと考えてのことだ。そのころの私は、自らの仕事に対する第三者の批評に飢えていた。さらに言えば研究の成果をどのようにまとめたら良いのか皆目見当がつかなかったのだ。すでに大学も卒業しており教員になったばかりだった。卒論も書いていたし、授業で高校生相手にレポートのまとめ方も教えていたのに・・・である。そんなレベルのこの私が、クモに関する単行本など書くのは不遜なのではないか。そんな気分だったように思う。

結果としてクミスアラグモの網と餌に関する原稿をまとめて出版してしまったわけで、



こんな反省も後の祭りであったわけだ。さらに、ずっと後年のことになるが、クモゼミに出席していた宮下さんが「うちの近所の図書館に子供と一緒に折に新海さんたちが書いた『動物のくらし』という本があって読みましたよ」と言われたことがあった。「穴があったら入りたい」とは、このようなときに使う言葉だろう。

イソコモリ・キムラ 継続観察メモ

谷川 明 男

動ける間は継続して観察しておきたいと思っていることが2つあります。

1つは岩手県北部の明戸海岸のイソコモリグモです。ここのイソコモリグモは、2011年の大津波によって絶滅してしまいました。各地の海岸のイソコモリグモの集団解析では、集団間に遺伝的な分化が見られたことから、イソコモリグモには大きな分散能力は備わっていないということが示唆されました。もしその通りであれば、明戸海岸のように局所絶滅が生じてしまった場合には、海岸の環境が回復したとしても他の生息地からの移住によってイソコモリグモの集団が復活することはないということになります。かの大津波によって、図らずもそれを実際に検証できる機会ができてしまいました。

2021年は、5月30日に明戸海岸を訪れました。大津波で破壊された旧防波堤は、一部が震災遺構公園として整備・保存されています。その内陸側には、さらに大規模な新防波堤が上に県道をのせて築かれています。大津波直後には荒れていた海岸もきれいな砂浜に戻っていますが、津波の引き波に運ばれてきたものなのか、海岸植物にまじって内陸性の草本もかなり生えています。海岸はきれいな砂浜に戻ったものの、大津波から10年が経った今年も、イソコモリグモは発見できませんでした。

明戸海岸からは、青森県おいらせ町の百石海岸に回って観察をすることにしています。ここのイソコモリグモは大津波を耐え抜いて絶滅を逃れましたが、その後、防波堤のかさ増し工事が行われました。かさ増し工事の時には防波堤の海側に工事用の車両が入ったようで、砂浜はきつく踏み固められた状態になってしまいました。当然そのような場所ではイソコモリグモは巣穴を作ることができません。その後どうなるのかと継続して見ていますが、今年見た限りでは、踏み固められた部分にも新たに砂が降り積もり、柔軟な状態に戻ってきていました。まだ完全には工事前の状態にもどっていないものの、以前には全く巣穴を見ることができなかった範囲でも巣穴がぼつぼつと見られるようになりました。このまま新たなかく乱が起きなければ百石海岸のイソコモリグモは安泰ではないかと思えます。

もう1つは、東大阪市枚岡公園のキムラグモの分布範囲の追跡です。ここのキムラグモは、そのハプロタイプから鹿児島県薩摩半島からの移入と思われますが、分布がまだパッチ状で、その範囲が把握できる状態にあります。集団解析によって、キムラグモの分散能力も極めて低いものだと推定していますが、それが実際にどの程度なのかを、ここの分布範囲の広がりかたを追跡することによって実際に測ることができると期待しています。

2021年は6月8日に観察に行きました。おおよそのところは前回（2019年10月24日）の観察とほぼ同じでしたが、前回発見できた場所で見つからなかったところもあつ

たので、ほんのわずか分布範囲が狭くなったというのが正確なところですが、大阪府は本来の分布地ではないので、生息条件があわないのではないかと危惧もありますが、すでに成体サイズからごく小さな幼体サイズまでのいろいろな大きさのものが多数生息していますので、完全に定着し繁殖を繰り返すことができているように思います。九州北部のキムラグモ類の分布北限線が、気候要因などの生息制限要因によるものではなく、北上のスピードが遅すぎて、いまだにそこまでしか行くことができていないだけはないかと思っていますが、どれほど遅いのかを大阪で実際に確かめることが楽しみです。

入退会は：

事務局 初芝伸吾 〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8

コンフィデンス高垣 105 有限会社エコシス

E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

通信原稿投稿先：

谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

通信の原稿締め切りは、4月末、8月末、12月末です。

KISHIDAIA 原稿投稿先：

谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

ファイルサイズが大きくてメール添付できない時には、ドロップボックスやグーグルドライブの転送機能・共有機能、宅ふぁいる便やデータ便などの転送サービスをご利用ください。(これまで利用していた Yahoo Box は、アップロード機能を廃止してしまいましたので利用できません。)

キシダイアの原稿締め切りは、6月末日と12月末日です。

来年度からは6月末、12月末を目安とし、予算枠内のページ数まで先着順とする予定です。

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 4000 円、学生 1000 円です。

(しばらくの間会費を値下げしておりましたが、2022 年度より元の水準に戻し、一般 4000 円、学生 1000 円といたします。)

会費は郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費のことは：会計担当 須黒達巳

〒150-0013 渋谷区恵比寿 2-35-1 慶應義塾幼稚舎

TEL : 080-5683-2765 E-mail: t.s.schlegelii@gmail.com